

農家民宿ちんちゃん亭

調査団体名	農家民宿 ちんちゃん亭	団体代表者名	鈴木啓佑・桂子
設立年	2015年8月	対応してくれた人の名前	鈴木啓佑・桂子
団体URL	https://tinchantei.eyado.net		
活動拠点	豊田市押井町寺ノ入4（旭地区）	調査員	曾我部行子、近藤朗、庄司知生、浜口美穂
取材日	2017年12月18日	レポート作成者	浜口美穂

活動内容

桂子さん(けーちん)と啓佑さん(けーちゃん)の結婚を機に始めた農家民宿の名は「ちんちゃん亭」。2人が出会うまでのそれぞれの活動や人間関係、出会いの場、そこでの交流があって今のちんちゃん亭がある。その長い物語のほんの一部を紹介する。

●それぞれの活動・仕事

桂子さん・・・「おひさまくらぶ」の立ち上げ、仲間たちと「とよたプレーパークの会」の立ち上げ、green maman(事例集 I 掲載)、脱原発活動、長く使い続けられるおもちゃを扱うおもちゃ屋、おもちゃコンサルタント、温熱刺激療法イトオテルミー療術師など多方面で活躍。一方、当時の結婚生活は、互いの夫婦観の相違のため離婚。

啓佑さん・・・街中の再開発ビルを運営・管理する会社のサラリーマンだったが、2012年に脱サラし、地元の集落営農組合のオペレーターをやりながら米作りを始めた。脱サラの大きな理由は次のようなもの。①地域リーダー養成講座の市職員向け講習に参加した時、足助・新盛地区の今後の人口シミュレーションを見せられてびっくり。ふるさとを差し置いて街中の活性化をやっている場合じゃないと感じた。②莫大な税金をつぎ込んだ再開発。でも、元々そこにあった下町のコミュニティにとってよかったのかという疑問。③家族のように大切にしていたセキセイインコが病気をした時に会社を休んで病院に連れていった。それを上司に「公私混同」と言われ、「大切な人に寄り添えるような生き方をしたい」と思った。

●出会いの場

千年委員会。啓佑さんは、持続可能な社会をつくろうと利他的に活動している大人たちの存在に驚いた。経済システムのひずみが様々な問題を生み出していることを知り、地元で活動していた「おむすび通貨」(事例集 I 掲載)を手伝うようになる。桂子さんは、脱原発が当たり前の空気の中で「(原発がいいか悪いか)ぶっちゃけわかんないですよね」と言った啓佑さんのことを「長いものに巻かれない、正直な人」だという印象を持った。

●2014年11月 入籍

啓佑さんは、自分の守るべきもののために行動するgreen mamanの女性たちを見て、結婚するならこのような人だと思いいパートナーを探していたが、「たまたまgreen maman本人に空きが出て」、入籍。

●2015年8月 ちんちゃん亭開業へ

啓佑さんが里を守るための集落営農をしながら続けられることや、桂子さんが子どもの頃から「人がわらわら出入りする長屋のような暮らし」に憧れていたこと、現金収入がすぐに得られることなどから、農家民宿を始めることに。啓佑さんの実家のはなれをリフォームして開業。

●経営方針は「とにかく偏りまくる」

啓佑さんも桂子さんも様々な仕事を複合的にこなす。自分たちが心地よい暮らしを求めていたら「一つのものに依存しない暮らし」に行き着いた。だから無理はしない。政治的な偏りもプライベートもFacebookで発信。2人の価値観に共感してくれる人が来てくれればよいと思っている。

●こだわりが詰まった民宿

・食・・・桂子さんがこれまで子どものためにできるだけ安全で手作りのものを食べさせたいとやってきたことがベースになっている。お米は啓佑さんが育てたミネアサヒ(矢作川源流の湧き水使用、除草剤を初期1回のみ使用)、味噌は完全オーガニックの手前味噌。料理に化学調味料は使わない。

・住・・・県内産天然乾燥の木材、化学物質99%フリー建材、壁は九州産火山灰を使用した漆喰、リサイクルウールの断熱材、一部オフグリッドの太陽光発電、松園式燃焼ユニット薪ストーブ(「木かんしゃ」参照)、アレルギー対応寝具、等々。

●イベントが充実

お客さんが講師になることが多い。「あさやんのイノシシ解体からの『丸ごと食べちゃおう!!』」「聴くのトレーニング『澄まし処(か)』」「まくのうちセラピー」など多数。特に、「ちんちゃんコン」は、日本一の合コンと自負している。

キャッチフレーズ

ふるさとのような居心地の良い場所を目指しています(毎月発行しているおたよりのキャッチコピー)

会のモットー(何を大切にしているか)

家庭も地域も、一番大事なものは、「自分がここにいてもいいと思える場所」と「人と人のつながり」。その両方がある、ふるさとのような場所になりたいと思っている。

例えば、毎月実家に帰るようにして来てくれる常連さんがいる。一人暮らしの中年男性だが、来るたびに掃除や、他の宿泊者に施設案内するなど、手伝ってもらっている。その人が役立つ場所、存在意義が感じられる場所になっている。

設立から現在に至るまで変化したこと

お客さんが講師になるので、イベントの数が増えていく。これからもどんな出会いがあるかわからないので、どんな化学変化が起こるか楽しみ。

連携している団体・専門家・自治体など

つながりで成り立っているから、書き切れない。

流域圏の担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、地域資源の活用など)

- ・ちんちゃん亭に行けば、いなか暮らしのエッセンスを見つけられる。人・本・情報との出会いがある。移住希望者が泊まりに来ることも。
- ・地域の交流拠点にもなっている。2016年には地域の新年会も開催。老人会の会合も行われる。
- ・啓佑さんは、あさひ若者会(事例集Ⅱ掲載)の代表を務めている。

現在直面している課題

桂子さんの健康が民宿を続けられる条件なので、健康維持に気を配る。将来、親の介護の必要が生じたときは民宿業は縮小するつもり。何が何でも民宿を続けなくてはいけないとは思っていない。

今後やってみたいこと

目指すことは何もない。夫婦2人の生活を壊してまでやろうとは思わないので、無理なく、楽しくやれる程度にお客さんが来てくれることを望んでいる。

チームオリジナルの質問

<質問内容>日本一の合コンの内容を教えてください。

<答え>

まず、参加条件は、「いなか、農業、動物、子ども」に興味ある人。1泊2日のスケジュール。事前に「10年後にどんな暮らしをしたいか」を聞き、各プロフィールを冊子にして当日配布する。

1. 夕食後に3分間の自己PRタイム。なぜちんちゃんコンに参加したか赤裸々に話してもらおう。「なぜ今、恋人がいないか」など。

2. 次の日は内観する時間。愛を感じる5つの条件「時間」「サービス」「スキンシップ」「言葉」「ギフト」の優先順位を理由も添えて発表。

3. 「余命1年と言われたらどんな暮らし方をしたいか」発表。

4. 昼ご飯は、薪割りをしてから餅つき。

5. 死生観ワークショップ。付箋に「大事な人」5人、「大事な活動・仕事」5つ、「大事なもの、ペット」5つ、「夢・将来の予定」5つを書き出す。自分が胃がんになって死期が迫ってくるというストーリーの過程で、大事な20のものを少しずつ捨てていく。いよいよ死ぬ時には最後に残った1つの大切なものを捨てる。

6. 最後に感想を言い合う。「結婚したいと思っていたけど、そうじゃなくて今の暮らしを変えたかったんだと気付いた」「自分のことを好きじゃないことに気付いた。自分のことを好きになってから出直します」「母との確執があったが、愛の感じ方が違ったんだと気付いた」などの感想もある。

※アフターフォローもある。別々のちんちゃんコンに参加した人たちでも、合うなと思ったら、個別につなげることもある。



取材風景



これまで子どもたちにできるだけ安全で手作りのものを品数多く食べさせたいとやってきたことがベースになっている



この日の夕食は、北海道のエゾシカを取り寄せ、すき焼き。「わざわざ育てたものでなく、増えすぎたものを食べればいい」



2階の本棚には、脱原発、自然に寄り添う暮らし、地域通貨、農業、自然、子育て、男と女の本等々、ラインナップが面白い。2人のこれまでの人生が垣間見える?!



雨の日でも遊べるようにと設置したヒノキの上れる木。プレーパークの経験が顔をのぞかせる

